

伊予の中世史料から探る弘法大師信仰と四国遍路

川岡 勉 (愛媛大学名誉教授)

Faith in Kōbō Daishi and the Shikoku Henro as seen in Medieval Archives from Iyo Province

Tsutomu KAWAOKA, Professor Emeritus, Ehime University

From Butsumokuji's (no. 42) temple records; the Ippen Hijiri-e that depicts Ippen Shonin (1239-1289) founder of the Jishū sect, when he made a pilgrimage to the cavern at Sugō; and from the engraved woodblock prints of Ishiteji that record the history of Ishiteji (no. 51) I examine the origins of the legend as to when Kōbō Daishi/Kūkai made a pilgrimage to various places in Shikoku. From these three medieval documents, the legend of Kōbō Daishi's making the Shikoku pilgrimage was apparently quite well known in the latter half of the Kamakura period (late 13th century).

Next, I explore the spread and popularization of Shikoku pilgrimage by examining the writing on the zushi^(*) in the main hall of Jōdoji temple (no.49), writings on the walls of the *gomadō* and woodblock documents at Ishiteji temple, as well as the ink inscriptions on the statue of Monju Bosatsu in the Daishi Hall at Sankakuji temple (no.55). From these medieval historical documents, it can be deduced that during the late medieval and early modern period (15th and 16th centuries), pilgrims came from a wide range of regions and that not only ordained monks but also lay people began to participate on the Shikoku pilgrimage. Also, it is evident that the act of writing waka poems of the same text as proof of a pilgrimage was popular among pilgrims.

Although there are still many unresolved aspects regarding the establishment of the Shikoku Henro, it is possible to trace the path its formation through several stages, such as the spread of the faith in Kōbō Daishi during the Insei period (11~12C), the spread of the legend of Kōbō Daishi making the pilgrimage in the late Kamakura period, and the spread and popularization of the pilgrimage in the late Middle Ages and early Modern Period. The medieval archives of Iyo reveal the routes through which the Shikoku Henro was formed through several stages.

*a cupboard-like case with double doors in which an image of (the) Buddha, a sutra, or some other revered object is kept at a temple

はじめに

四国遍路が現在みられるような形で成立するのは近世初期とされている。しかし、それ以前の中世においても四国の寺社への参詣や巡礼が行われており、それが四国遍路の札所巡礼を生み出す基盤になっていたことは確実である。

近年、四国遍路の関係資料の調査研究が急速に進展し、関連する古代・中世の史料についても、これを網羅的に収録した史料集がまもなく刊行される予定である。本稿は、史料集の編纂事業において筆者が担当した伊予(愛媛県)の中世史料をもとに、弘法大師空海の廻国伝承と四国巡礼の広がりについて考察を加えるものである。

1 弘法大師の四国廻国伝承

(1) 仏木寺記録

弘法大師空海の四国廻国伝承は、さまざまな形で今に伝えられている。伊予の中世史料のうち、空海の廻国伝承を伝える古い史料として、第42番札所の仏木寺(宇和島市三間町)に伝来する「仏木寺記録」がある。これは当寺の由緒を伝える根本史料として重んじられた記録で、金銀の砂子を吹き付けた美しい料紙に寺の沿革が綴られている。作成年代は不明であるが、大同2年(807)から建治2年(1276)までの記事を見い

だすことができる。全文を掲げてみよう。

佛木寺記録

大同二年弘法大師御帰朝之後、四州御巡礼之時、件深山在御一宿、而傍楠木奉刻金剛界大日如来像、眉間奉入一珠玉、則佛木寺大日如来是也、此玉者是大師御帰朝之時、惠果和尚於陽州門御対面之時、自大日如来御相承之三鉢与一珠相傳之云々、玉者深納、三鉢被投高野山、玉者則佛木寺大日如来眉間入納給云々、巨細之旨見四国巡礼記録、于時 平城天皇御宇大同二年三月廿一日御造立云々、其後松殿僧正任四国巡礼之記録、相尋彼寺之處、親拝見大日尊像、則抑感涙切拂林木、安置尊像、其後被覆荊棘數廻、里老常蒙靈夢之告、于時致仁治元年大貳律師宣俊庄務之時、重致興行、寄附田園、而擬西園寺太政大臣家之御菩提道場、同四年御堂造營、同年六月棟上、同年十一月十五日供養、同二年十月御堂供養、寛元三年十月 日、重御下知状等下給、建長六年十月、又修理御堂、文永八年四月五日、鎮守三所権現御寶殿造營、建治二年十月、弘法大師御影堂造立、

「佛木寺記録」の記述を要約して示すと次のような内容からなる。①唐より帰朝した弘法大師が大同2年に四国の巡礼を行った際に、ある奥深い山で野宿をした。その時、大師は傍にあった楠木に金剛界の大日如来像を刻み、眉間に一つの丸い玉を埋め込んだ。これが佛木寺の大日如来像である。弘法大師は唐より帰朝する際、師である惠果と揚州門で対面し大日如来より授かった三鉢杵と玉を受け継いだ。三鉢杵は高野山に安置し、玉は佛木寺の大日如来像の眉間に納めた。②松殿僧正が訪問して大日如来像を拝見し、林木を切り払ってこの像を安置した。③里の長老が夢の中で神仏のお告げをうけ、仁治元年(1240)に宇和荘の荘務をつとめる大貳律師宣俊が寺の再興を志して田園を寄附し、領家である西園寺太政大臣家の菩提道場とされることになり、同4年に御堂の造営がなされた。④寛元3年(1245)10月に、重ねて御下知状などを給わった⁽¹⁾。⑤建長6年(1254)10月には、御堂の修理がなされた。⑥文永8年(1271)には、鎮守三所権現と御宝殿が造営された。⑦建治2年10月には、弘法大師御影堂が造立された。

「佛木寺記録」に見える弘法大師の四国廻国伝承は、いつ頃生まれたものであろうか。佛木寺の本尊である大日如来像の胎内には、墨書銘が確認できる。この墨書銘には、「大願主僧栄金 興法大師作仏之楠少々此中作入者也 建治元年 才次七月乙亥廿五日」と書かれている。本像は建治元年(1275)に僧栄金を大願主として作られたもので、弘法大師の刻んだ楠木を混入したというのである。ここから、弘法大師が楠木を刻んで大日如来像を製作したとする伝承が鎌倉時代後期までに成立していたことが分かる。また、佛木寺に伝来する弘法大師像にも墨書が見つかっており、そこには「正和三年十月五日御開眼」と書かれている。正和4年(1315)の製作とすれば、作像年の判明する弘法大師像としては全国で3番目に古い。鎌倉後期において当寺に弘法大師信仰が広がっていた様相をうかがい知ることができよう。

(2) 一遍聖絵

一遍は、鎌倉時代に伊予国の有力武士である河野氏の家に生まれた、時宗の開祖として知られる念仏僧である。彼は東北地方から南九州に至るまで、諸国を巡って遊行の旅を行った。一遍が巡拝した各地の寺社や霊場の中には、伊予の岩屋寺や繁多寺、讃岐の善通寺・曼荼羅寺など、のちに四国遍路の札所となる巡礼地が含まれている。

一遍の遊行の旅を描いた「一遍聖絵」は、彼の死から10年後の正安元年(1299)に製作され、異母弟とされる聖戒が詞書を作成し、画僧の法眼円伊が絵を描いた絵巻物である。全12巻48段からなり、もとは京都の歓喜光寺にあり、現在は神奈川県清浄光寺に所蔵されている(但し、第7巻は東京国立博物館所蔵)。

「一遍聖絵」巻2の一遍が岩屋寺の前身である菅生の岩屋に参籠した時の詞書に、「其所に又一の堂舎あり、高野大師御作の不動尊を安置したてまつる、すなはち大師練行の古跡、瑜伽薫修の炉壇ならびに御作の影像すがたをかへずして此地になをのこれり」と書かれている。ここから、弘法大師の菅生の岩屋参籠の伝承は鎌倉時代後期までに成立していたことが判明する。但し、ここでは弘法大師の伝承は1つの堂舎(不動

堂)の由来に関わって付随的に述べられているにすぎないことに注意する必要がある。「一遍聖絵」には菅生の岩屋は「観音影現の霊地、仙人練行の古跡なり」と書かれており、当地の聖地性はもともと弘法大師信仰によって語られるものではなかったことが分かる。ところが近世になると、承応2年(1653)の澄禅『四国遍路日記』に岩屋寺の遍割岩の由来が「昔大師此山ヲ開キ玉フ時仙人出テ、我ハ此山ノ主也、ソツジニハ難開ト云」と記されるように、聖地としての性格が弘法大師信仰に収斂する形に変容していくのである。

(3) 石手寺刻板文書

第51番札所の石手寺(松山市)は、空海を追って四国遍路を始めた衛門三郎が死ぬまぎわに空海から石を授かり、その生まれ変わりである子が手に握っていた石が奉納されたことから石手寺と称したとする衛門三郎伝説で知られる。寺の由緒を伝えるのが永禄10年(1567)製作とされる刻板文書であり、厚さ1.6センチの板の表面に和銅5年(712)から文明13年(1481)までの安養寺(石手寺の旧名)の由緒と河野伊予守通宣の名前・花押が刻まれ、裏面には建物・文書・寺社領田・宝物の一覧が刻字されている。

表面の由緒書からは、白山信仰・薬師信仰・真言密教・熊野信仰・弘法大師信仰・三島信仰など、さまざまな信仰が当寺に流入し、新たな要素が付け加えられてきたことがうかがわれる。そして、淳和天皇の治世期である天長8年(831)のこととして、浮穴郡江原郷の「右衛門三郎」の話が由緒書に見える。これが衛門三郎伝説の初見である。また、寛治3年(1089)には、白河院の院宣により弘法大師の木像が下賜されて、木像を安置する影堂が建てられたことが見えており、院政期における弘法大師信仰の広がりをおうかがわしている。

由緒書に見える「右衛門三郎」の話は以下のとおりである。

天長八^年載、浮穴郡江原郷右衛門三郎、求利欲而富貴破悪逆而仏神故、八人男子頓死、自尔剃髮捨家順四国邊路、於阿州焼山寺麓及病死、一念言望伊豫国司、爰空海和尚一寸八分石切、八塚右衛門三郎銘封左手、経年月生国司息利男子、継家号息方件石令置当寺本堂畢

この由緒書では衛門三郎の巡礼は天長8年のこととするが、もちろんそれをそのまま信じることはできない。注意されるのは、この由緒書には、衛門三郎が旅僧への施しを拒絶したとか、鉢が8つに割れて飛んでいったとするなど後世の伝説に含まれるエピソードが認められず、衛門三郎が空海を追って四国遍路に出たとする設定にもなっていないことである。当初の衛門三郎伝説は、後世のものに比べると、かなりシンプルな内容であったことがうかがえる。

それでは、この伝説の誕生はいつ頃までさかのぼるのであろうか。石手寺という寺名の登場は、衛門三郎伝説にちなむものとみてよからう。そして、それは当寺における熊野信仰の浸透を示すと考えられる⁽²⁾。一次史料によれば、正安3年(1301)の六波羅御教書(三島家文書)に「石手民部房」の名が登場する。建武3年(1336)の河野通盛手負注文写(譜録)には、「石手寺円教房増賢」の名が見える。これらの史料からみて、衛門三郎伝説が少なくとも鎌倉時代後期までに成立していたのは確実であろう。

平安時代には弘法大師による四国廻国の伝承は成立していなかったとみられるが、11世紀以降、四国の寺院の中に弘法大師に関する伝承を記した史料が登場する。治暦2年(1065)の讃岐曼荼羅寺の「僧善芳解案」、延久2年(1070)の土佐金剛頂寺の「金剛頂寺解案」、讃岐塩峯・土佐御厨戸明神・阿波高越寺について記した元永元年(1118)の「高野大師御広伝」などである。これは平安末・院政期における弘法大師信仰の広がりをお示すものと言えよう⁽³⁾。そして、鎌倉時代後期(13世紀後半)になると、弘法大師の四国廻国伝承がかなり広まっていたことを、本稿で取り上げた伊予の中世史料(仏木寺記録・一遍聖絵・石手寺刻板)から推測することができるのである。

2 四国巡礼の広がりとお衆化

(1) 浄土寺本堂厨子落書

第49番札所の浄土寺(松山市)の本堂にある本尊釈迦如来像を納める厨子には、中世末期～近世の落書

(墨書)が残されている。厨子の製作は大永2年(1522)のことであり、厨子に書かれた落書は巡礼者が参詣した際に書き残したものである。落書の内容は、ほとんどが参詣者の名前と出身地・参詣期日などを書き記したものであり、大永5年・同7年・8年・享禄4年(1531)・文禄・寛永19年(1642)・同20年・正保の年次が判読できる。

浄土寺の落書から読み取れるのは、第1に参詣者の分布が広範囲に及ぶことである。書かれている地名には、三河国、越前国、紀伊国の高野山や根来寺、大和国、播磨国の書写山、備後国因島、四国では阿波国・土佐国などがある。東海・北陸や近畿地方など遠隔地からも参詣者が訪れていたことが分かる。

第2に、人名からみて参詣者の多くは出家した修行僧であったと思われるが、越前国一乗谷の住人「ひさの小四郎」など世俗の者も混じっていたようである。俗人が四国巡礼に参加し始めていたことをうかがわせる史料である。

第3に、寛永19年5月2日に大和国城上郡初利村から来た巡礼者は、「書き置くも 形見となれや 筆の跡 いくづの土と 我はまつらん」という和歌を書き残している。ほぼ同文の歌が土佐神社本殿内陣の元亀2年(1571)の落書に残っているほか、山形県や新潟県など全国的に確認できる。この歌には、自分がどこで命を終えても筆跡を残すことで「形見」として参詣の事実を後世に伝えようとする意識が込められており、巡礼時の落書にふさわしいものと言えよう。作者は不明であるが、中世末から近世初期にかけて巡礼者によって全国に広がっていたことが、各地の落書などからうかがうことができるのである⁽⁴⁾。

(2) 石手寺護摩堂落書

巡礼者の書き残した落書は、第51番札所の石手寺の護摩堂でも確認することができる。これによれば、永禄13年(1570)6月17日に静安、5月吉日に二神某が参詣した。承応2年(1653)3月21日には、忽那源兵衛という者が参詣している。16世紀から17世紀にかけて、各地の寺社には落書が集中的に残されているが、参詣者による落書は単なる参拝記念ではなく、巡礼者の祈りが籠められたものであり、いわゆる札打ち(納札)につながっていくとみることができよう。

同寺に残された石手寺刻板文書(永禄10年)の裏面には、薬師堂を「札所本堂」とする記述が認められる。四国巡礼が広がり大衆化する中で、札所という概念が成立してきているとも考えられるのである⁽⁵⁾。

(3) 三角寺大師堂の文殊菩薩像の墨書銘

第65番札所の三角寺(四国中央市)の大師堂にある文殊菩薩像の内部からも、墨書が発見されている。墨書銘文によれば、本像は文禄2年(1593)に三角寺住僧の乗慶が施主となり、薩摩出身で宇摩郡法花寺に住む仏師佐意が製作したものであることが判明する。奥院である仙龍寺の住持慶祐やその弟子など、造像に協力・帰依した人々の名前も書きこまれている。

墨書銘には「先師勢恵法印道香妙法二親タメ也」とあり、当寺の住僧乗慶が先師の勢恵ら二親のために作像を發願したことが分かる。勢恵は永禄5年(1562)に新宮村の熊野神社の遷宮の導師を務めた人物であり、三角寺と熊野信仰の深いつながりがうかがえる。

墨書には「四国邊路之供養ニ、如此山里諸旦那勸進、殊邊路衆勤め候也」とも書かれており、造像には四国遍路の供養の意味も込められていたように思われる。本像は各地の檀那・信者から勸進・寄附を募るとともに、邊路衆(巡礼者)の協力も得て製作されたと考えられるのである。

浄土寺の落書、石手寺の落書や刻板文書、三角寺の墨書銘からは、中世末～近世初期に四国巡礼の広がりと大衆化が進行していた様相がうかがわれる。広範囲の地域から巡礼者が訪れ、出家した修行僧だけでなく俗人も四国巡礼に参加し始めていた。参詣した証しに同文の和歌を書き付ける行為が巡礼者の間で流行していたことも認められる。このような動きの中で、四国遍路の札所寺院が形成されていくものと考えられるのである。

おわりに

平安時代の末期(11世紀)以降、弘法大師信仰は新たな靈驗伝説を加えて地方に広がったとされる。聖の

活動が活発化するのを背景として、東寺の末寺組織形成とつながりをもって大師伝説が展開したと考えられている。本稿では、鎌倉時代の後期（13世紀後期）には弘法大師廻国伝承がかなり流布していたと思われることを指摘した。

中世末の16世紀になると、出家した修行僧にとどまらず、世俗の者も四国巡礼に加わり始める。弘法大師信仰が一層の広がりで大衆化をみせる中で、いわゆる四国遍路が成立してくるのであろう。

本稿は伊予に残る中世史料を手がかりとした限られた考察ではあるが、弘法大師信仰の広がりや四国巡礼の普及・大衆化の一端を明らかにしてきた。四国遍路の成立過程についてはさまざまな角度からアプローチがなされているとはいえ、まだまだ不明な部分が多い。その前段階である中世の四国巡礼についても、実態解明が進んでいるとは言い難い。関連する古代・中世の史料集の刊行を機に、これを基礎とした研究の進展が望まれるところである。

【註】

- (1) 仏木寺には、寛元3年10月13日付の権律師宣俊下知状が現存する（仏木寺文書）。これは、宣俊が仏木寺院内の支配を栄全という僧に委ねたものであり、当寺の四至（東西南北の境界）が書かれており、寺域の広がりをうかがうことができる。
- (2) 衛門三郎伝説の始発となる浮穴郡の江原（荏原）にある八坂寺の山号は熊野山であり、衛門三郎が最期を迎える阿波焼山寺もまた熊野信仰の拠点として知られている。「石手寺刻板文書」によれば、衛門三郎の転生男子の握っていた石を納めた石手寺は、熊野社が勧請された時に熊野山石手寺と改められたとされ、衛門三郎伝説の普及は当寺が熊野信仰に染め上げられていく事情を反映している（川岡勉「中世の石手寺と四国遍路」、四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』法蔵館、2007年）。また、近世の地誌である『予陽郡郷俚諺集』においては、衛門三郎の生まれ変わりである河野息方が「熊野権現の申子」と記されている。このように、衛門三郎伝説には熊野信仰の影響が色濃くうかがえるのである。
- (3) 白井優子『空海伝説の形成と高野山』（同成社、1986年）。
- (4) 三上喜孝『落書きに歴史をよむ』（吉川弘文館、2014年）。
- (5) 石手寺刻板文書に関しては、近年の研究でいくつかの疑問点が指摘されており、史料の性格について慎重に検討を加えていく必要がある（石岡ひとみ・山内治朋・井上淳「石手寺刻板（河野通宣安養寺由緒書刻板）について—附 永禄五年河野氏制札の発給者再考—」、愛媛県歴史文化博物館『四国遍路と愛媛の霊場』二〇一八年）。